

りした事象の差異点や共通点をとらえて記録報告する。(理科, 社会等)

- ・ 比較や分類, 関連付けといった考えるための技法, 帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する。(算数・数学, 理科等)
- ・ 仮説を立てて観察・実験を行い, その結果を評価し, まとめて表現する。(理科等)

この改善答申でも, 「記録報告する」「説明する」「まとめて表現する」などの言語活動を行うことが述べられている。

#### (ウ) 問題解決学習における言語活動

先に述べた「仮説を立てて観察・実験を行い, その結果を評価し, まとめて表現する」は, 問題解決学習の学習プロセスに沿ったものである。そのプロセスは, ①問題を把握する, ②予想(仮説)を立てる, ③確かめの実験をする, ④結果をまとめる, ⑤新たな問題を見いだす, といったものが考えられる。千葉県教育委員会が出した「思考し, 表現する力」を高める実践モデルプログラムを参考にすると, ①の場面では, これから何を調べていくのか視点をはっきりさせるために, 「疑問を書き出す」, ②の場面では, 疑問を解決するための予想(仮説)を過去の学習経験などを根拠理由との関係から「自分の考えを書く」, ③の場面では, 予想(仮説)の真偽を確かめるための実験方法を「もし, ……ならば, ~である」といった文章にまとめ, 実験をする。④の場面では, 実験結果と自分の予想(仮説)を比較させたり, 根拠を明確にして友達に説明をする。また, 友達の考えと比較して自分の考えを深める。⑤の場面では, 今日学んだことを整理して, 「改善点をもとに新たな解決計画を立案する」といったように, 各プロセスごとに自分の考えを文章化する言語活動を行うことが大切である。

その他, 子どもの使用する言語を, 例えば「勢いがある」を「速度」といったような「日常言語, 生活言語」から「科学言語」を使うよう指導することも必要である。

### オ 生活科における言語活動の充実

#### (ア) 学習指導要領における「言語活動」に関する記載内容

##### 学習指導要領 第2 各学年の目標及び内容

##### 1 目標

- (4) 身近な人々, 社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに, それらを通して気付いたことや楽しかったことなどについて, 言葉, 絵, 動作, 劇化などの方法により表現し, 考えることができるようにする。

##### 学習指導要領 第2 各学年の目標及び内容

##### 2 内容

- (8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い, 身近な人々とかわるものの楽しさが分かり, 進んで交流することができるようにする。

##### 学習指導要領 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

##### 2 第2の内容の取扱いについては, 次の事項に配慮するものとする。

- (2) 具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考えさせるため, 見付ける, 比べる, 例えるなどの多様な学習活動を工夫すること。

「目標(4)」は, 児童が例えば, 見る, 聞く, 触れる, 作る, 探す, 育てる, 遊ぶなどの様々な活動の楽しさを味わうことや, そのための技術, 能力を身に付けること, 活動や体験したことを表現し, 考えることができるようにすることを目指している。児童は, 様々な活動に, 生き生きと楽しく活動する中で, 様々な気付きをしており, それらについて言葉や絵, 動作, 劇化などの多様な方法を使って表現することによって, 生み出した気付きを自覚することにつながるとされる。

「内容の（８）」は、今回新設された内容である。「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、互いのことを理解し合ったり心を通わせたりしてかわることの楽しさが実感として分かり、身の回りの多様な人々と進んで交流できるようにすることを目指している。この活動では、直接話しかけることなど、言葉を中心とした伝え合う活動が活発に行われる。また、表情やしぐさ、態度といった言葉によらない部分も、伝え合う活動においては大切な部分としている。

「第２の内容の取扱い」については、次の事項に配慮するものとする。（２）では、これまでの生活科の課題として、学習活動が体験だけで終わり、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われないという指摘から設けられたものである。児童は、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動を行いながら、気づきを比較したり、分類したり、関連付けたりして考え、より質の高い気づきを生み出していく。そのためにも、児童が自らの気づきを振り返ったり、互いの気づきを交流したりするような活動を工夫することが大切とされている。

以上のことをまとめると

- a 様々な活動や体験したことを表現する活動
  - ・言葉や絵、動作、劇化などの多様な方法を使って表現する。
- b 出来事を身近な人々と伝え合う活動
  - ・言葉、表情やしぐさ、態度などで交流する。
- c 活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める活動
  - ・自らの気づきを振り返ったり、互いの気づきを交流したりするような活動を工夫する。

解説書より生活科の目標を形成する５つの要素について

- a 具体的な活動や体験を通す。
- b 自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもたせる。
- c 自分自身や自分の生活について考えさせる。
- d その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせる。
- e 自立への基礎を養う。

#### （イ）言語活動との関係

この５つの要素ごとに、言語活動との関係を学習指導要領から読み取ってみると、

- a 具体的な活動や体験を通すこと  
見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして、直接働きかける学習活動であり、またそうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉や絵、動作、劇化などの方法によって表現する。
- b 自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもつ。  
児童を取り巻く人々、社会及び自然が自分自身にとって持つ意味に気づき、身の回りにあるものを見直し、切実な問題意識をもって新たな働きかけをしたり表現したりする。
- c 自分自身や自分の生活について考えること  
低学年における気付くことは、集団生活になじみ、集団における自分の存在に気付くことである。活動の中において、仲間意識や帰属意識が育ち、共によりよい生活ができるようになることである。友達の存在に気付くことでもある。また人や自然にやさしくできること、友達のよさにも気づき、認め合い、そのよさを生かしあって共に生活や学習ができるようにする。

d 生活上必要な習慣や技能を身に付けること。

生活上必要な習慣には、健康や安全にかかわること、みんなで生活するための決まりにかかわること、言葉遣いや身体の振る舞いにかかわることなどがある。具体的には、適切なあいさつや言葉遣いができること、訪問や連絡、依頼の仕方を知るなどである。

e 自立への基礎を養う。

具体的な活動や体験を通すことによって、身近な対象と自分とのかかわりに関心を持つこと、自分自身や自分の生活についての理解を深めること、生活上必要な習慣や技能を身に付けることである。

- ・自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できる。
- ・生活上必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々と適切にかかわることができる。
- ・自分のよさや可能性に気づき意欲や自信をもつことによって前向きに生活していくことができる。

生活科の目標である自立の基礎を養うという観点において、すべての活動にわたって言語活動を重視した取り組みが必要である。

## カ 音楽科における言語活動の充実

### (ア) 学習指導要領における「言語活動」に関する記載内容

#### ○〔共通事項〕の新設

表現及び鑑賞領域に関する能力を育成する上で共通に必要な〔共通事項〕を内容に位置付けた。音楽を形づくっている要素を聴き取り（知覚し）、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取る（感受する）こと、また、「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」を音楽活動を通して理解することなどを示した。

音楽そのものと子どもの知識・技能をつなぐものが〔共通事項〕に示されているものであり、子どもの使う「言語」ともなる。〔共通事項〕のキーワードは、子どもから出てきた言葉でよく、それをいかに思考・判断し、表現や鑑賞の活動と結び付けるかが重要である。そして、聴き取った（知覚した）ことは、音楽そのもので絶えず確かめながら、聴き取った（知覚した）ことのそれぞれの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取り（感受し）、表現や鑑賞の能力を高めていくものである。

小学校 〔共通事項〕ア 音楽を形づくっている要素

ア音楽を形づくっている要素のうち、(7) 音楽を特徴付けている要素 (イ) 音楽の仕組みを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取る。

#### 「音楽を形づくっている要素」

(7) 「音楽を特徴付けている要素」 (イ) 「音楽の仕組み」

(7) (イ) に加え、歌詞、歌い方や楽器の演奏の仕方、演奏形態など、  
音楽というものを形づくっている要素を含む

(7) 「音楽を特徴付けている要素」 ※ ( ) …示されている学年段階  
…音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ(低・中・高)

音の重なり、音階や調（中・高）

和声の響き（高）

(イ)「音楽の仕組み」

…反復、問いと答え、（低・中・高）

変化（中・高）

音楽の縦と横の関係（高）

その他）歌詞・歌い方・楽器の演奏の仕方・演奏形態も音楽を形づくっている要素

音楽を特徴付ける要素及び音楽の仕組みは、特定の音楽にかかわるものではなく、様々な国の音楽に共通に含まれる

小学校 〔共通事項〕 イ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語

イ「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」について、音楽活動を通して理解すること。

「音符、休符、記号や音楽にかかわる用語」の指導については、単にその名称やその意味を知ることだけでなく、表現及び鑑賞の様々な活動の中で、その意味や働きを理解したり表現及び鑑賞の活動に用いたりするようにすることが重要である。ここで示している音符、休符、記号や音楽にかかわる用語は、小学校では、必要なものを従前より6種類増加している。これらについては、取り扱う教材、内容との関連で必要と考えられる時点で、その都度繰り返し指導していくようにし、6年間を通した継続的な指導計画に沿って学習を進める中で、音楽活動を通して徐々に身に付けていく。

五線と加線

♯ ♭ ♮ f mf p mp V (プレス)

2/4 3/4 4/4 6/8

|| (反復記号) 1. 2. || (反復記号)

(タイ) (スラー) (アクセント) (スタッカート)

♩ = 96

中学校 〔共通事項〕 ア 音楽を形づくっている要素

ア 音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること。

中学校 〔共通事項〕

イ 音楽を形づくっている要素とそれらの働きをあらわす用語や記号など

イ 音楽を形づくっている要素とそれらの働きをあらわす用語や記号などについて、音楽

活動を通して理解すること。

〔共通事項〕の示し方は第1学年と、第2学年及び第3学年は同じである。学習の深化を図るように配慮することが大切である。イについて、中学校では、小学校に示したものに加えて、生徒の学習状況を考慮して取り扱う。中学校3年間で取り扱うものの指導にあたっては、単に名称などを知るだけでなく、音楽活動の中でそれらの働きを実感し、表現や鑑賞の学習に生かすことができるように配慮することが大切である。

拍 拍子 間 序破急 フレーズ 音階 調 和音 動機 Andante Moderato Allegro  
rit.a tempo accel. legato dim D.C. D.S.  
(フェルマータ) (テヌート) (三連符) (二部休符) (全休符) (十六分休符)

#### ○鑑賞領域における改善

小学校では、鑑賞領域の各学年の内容に、感じ取ったことを言葉で表すなどの活動を位置付け、楽曲や演奏の楽しさに気付いたり、楽曲の特徴や演奏のよさに気付いたり理解したりする能力が高まるよう改善を図った。これは、受動的になりがちであった鑑賞の活動を、児童の能動的で創造的な鑑賞の活動になるように改善することを意図したものである。

中学校では、やはり鑑賞領域において、音楽の学習の特質に即して言葉の活用を図る観点から、「言葉で説明する」、「根拠をもって批評する」など、音楽のよさや美しさを味わうこととし、音楽の構造などを根拠として述べつつ、感じ取ったことや考えたことを言葉を用いて表す主体的な活動を重視している。

これら鑑賞領域の学習活動において、〔共通事項〕を踏まえて、感じ取ったことを述べるときや根拠をもって批評するときに、観点を共有した言語活動の充実を図っていく。音楽科における鑑賞の学習は、音楽によって喚起されたイメージや感情などを、自分なりの言葉で言い表したり書き表したりする主体的・能動的活動によって成立する。音楽のよさや美しさなどについて、言葉で表現し他者に伝えることが音楽科における批評である。このように自分の考えなどを表現することは、本来、生徒にとって楽しいものであり、それが他者に理解されるためには、客観的な理由を基にして、自分にとってどのような価値があるのかといった評価をすることが重要となる。ここに、学習としての大切な意味がある。根拠をもって批評することは創造的な行為であり、それは、漠然と感想を述べたり単なる感想文を書いたりすることとは異なる活動である。

#### (イ) 言語活動との関係

##### ○〔共通事項〕に着目した、音楽科学習における言語活動

音楽科における表現活動や鑑賞活動において、〔共通事項〕を学習の支えとし、音楽そのものを絶えず確かめながら、聴き取った（知覚した）ことのそれぞれの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取り（感受し）、表現や鑑賞する能力を高めていく。〔共通事項〕のキーワードを共有しながら、音楽のよさや面白さ、美しさを言葉で表し、表現や鑑賞の学習を深めていく。

特に、鑑賞活動で実現できるように、学習指導要領に示されている。

##### ○ 歌唱教材の歌詞の扱いと表現活動（歌唱共通教材の取扱いも関連）

歌唱表現教材では、日本語の歌詞がある。表現活動において、自分の歌いたい思いや

意図をどのように音楽表現していくか、という観点から言語活動を考えることもできる。旋律やリズムと言葉との関係、歌詞のもつ詩情を味わいながら日本語の美しい響きを生かして表現を工夫する、情景を想像して歌う、などの活動が考えられる。

なお、歌唱共通教材については、小学校では取り扱う楽曲数を増加し、中学校では、我が国のよき音楽文化を世代を超えて受け継ぐという観点から、今改訂で具体的に示されている。

## キ 道徳における言語活動の充実

### (ア) 学習指導要領・報告書案における「言語活動」に関する記載内容

#### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 3の(4)

自分の考えを基に、書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。

#### 「報告書案」7. 教科等を横断した指導の充実の考え方

- 道徳的価値観の形成を図る観点から、自己の心情・判断等の表現力を高めるため「書く活動」を重視することが考えられる。
- 道徳的心情を豊かにするため、人に感動を与える心の美しさや強さを浮き彫りした題材等を活用することが考えられる。
- 道徳的な問題に対する判断力を育成するため、公正、正義などの倫理的諸価値を用いて様々な課題について討論等を行い考察させるような指導を行うことが考えらる。

学習指導要領では、「書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実する」と述べている。また、解説書では、「道徳の時間の学習では、中心的な資料が生かされ、児童の体験や資料に対する感じ方や考え方を交えながら話し合いを深めることが学習活動の中心となることが多い。道徳の時間における言語の役割はきわめて大きい。」と記述されている。さらに、「資料の内容や登場人物の気持ちや行為の動機などを考える。友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったり、書いたりする。さらに、学校内外での様々な体験を通して感じ、考えたことを、道徳の時間に言葉を用いて話し合ったりする。

(中略) 道徳の時間においては、このような言葉の能力を総動員させて学習に取り組ませることが、ねらいを達成する上できわめて重要であると考えられる。」とあることからわかる通り、道徳の時間のねらいを達成するためには、児童生徒の言語力は欠かせないものである。

「報告書案」では、「書く活動」の大切さを述べている。児童生徒は、自分の考えを整理し、まとめるためにも書く活動は重要である。話し合い活動をより深いものとするためにも、書く活動を重視することが大切である。

### (イ) 言語活動との関係

道徳における言語活動としては、「資料を読んだり聞いたりして理解する活動」、「話し合い活動」「書く活動」「表現する活動」等が考えられる。

#### a 資料を理解する活動

- ・ 自分の経験と重ねながら資料（物語、伝記、映像、劇・・・）を読んだり、聞いたり、見たりする。

#### b 話し合い活動

- ・ 話し合いは、児童生徒相互の考えを深める中心的な学習活動
- ・ 意見を出し合う、まとめる、比較するなどの目的に応じた話し合い活動
- ・ 座席の配置、名札の活用
- ・ グループやペアによる話し合い

c 書く活動

- ・ 自らの考えを深めたり，整理する学習活動
- ・ 書く時間の確保
- ・ 心の成長記録

d 表現する活動

- ・ 発表や記述，劇化（演技，動き，せりふ・・・），人形劇
- ・ 音楽の活用
- ・ 追体験，実験や観察，調査等実感をともなう活動

道徳の時間のねらいを達成させるためにも，上記のような言語活動を充実させていくことが大切となる。

ク 外国語活動・外国語科における言語活動の充実

（ア）学習指導要領・答申における「言語活動」に関する記載内容

第2 内容 【第5学年及び第6学年】

- 1 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう，次の事項について指導する。
  - （1）外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
  - （2）積極的に外国語を聞いたり，話したりすること。
  - （3）言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。
- 2 日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深めることができるよう，次の事項について指導する。
  - （1）外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに，日本語との違いを知り，言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
  - （2）日本と外国との生活，習慣，行事などの違いを知り，多様なものの見方や考え方があること気付くこと。
  - （3）異なる文化をもつ人々との交流等を体験し，文化等に対する理解を深めること。

中学校 第2 各言語の目標及び内容等 2 内容 （1）言語活動

ア 聞くこと

- （ウ）質問や依頼などを聞いて適切に応じること。
- （エ）話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。

イ 話すこと

- （イ）自分の考えや気持ち，事実などを聞き手に正しく伝えること。
- （ウ）聞いたり読んだりしたことなどについて，問答したり意見を述べ合ったりなどすること。
- （オ）与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。

ウ 読むこと

- （エ）伝言や手紙などの文章から聞き手の意向を理解し，適切に応じること。
- （オ）話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう，書かれた内容や考え方などをとらえること。

エ 書くこと

- （ウ）聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり，感想，賛否やその理由を書いたりなどすること。
- （エ）身近な場面における出来事や体験したことなどについて，自分の考えや気持ちなど

を書くこと。

(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

小学校外国語活動では、解説書には「単に児童が喜ぶような楽しい活動を行えばよいというものではない。児童が使える外国語を駆使し、様々な相手と互いの思いを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体感することが大切である。」と述べている。コミュニケーションの楽しさを味わわせることによって、コミュニケーションへの積極的な態度を育成することができるのである。

また、外国語のもつ音声やリズムなどに慣れ親しませることが大切になる。そのために、歌やチャンツなどを通して、英語特有のリズムやイントネーションを体得することにより、日本語と英語の音声面等の違いに気付くことになる。日本語とは異なる言語に触れることにより、言語の大切さや豊かさに気付かせたり、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身に付けさせたりすることは、国語に関する能力の向上にも資するものである。新しい言葉にふれ、学ぶことで、母国語である日本語にもより関心が高まり、力が付くと考えられる。

中学校外国語科では、小学校の外国語活動で音声面を中心として外国語を用いたコミュニケーション能力の素地が育成されることになったことを踏まえ、「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」を明示した。また、授業時数を105時間から140時間に増加し、言語活動を通じて言語材料の定着を図るとともに、コミュニケーション能力の一層の育成を目指している。

「報告書案」7. 教科等を横断した指導の充実の考え方

#### 【小学校】

- 小学校の英語活動等においては、体験的な活動等を通して言葉のもつ意味、言葉の大切さ（言語による相互理解等）、日本語との違いなどに気付かせることが重要である。このことがメタ言語能力の芽生えを形成する上で重要な役割を果たすものであると考えられる。
- 小学校の英語活動等においては、コミュニケーション能力を養う上で必要となる積極的な態度の育成が可能であり、中学校以降続く英語教育にも資するものである。また、非言語を含めて、コミュニケーションを図るために、言語力を総動員することの大切さを理解させることができる。
- 小学校の英語活動等は、小学生にとって自己を表現したり、言語やコミュニケーションに関する感覚を養ったりする体験的機会ととらえることができる。他の言語にふれる体験を通して、日ごろ用いている日本語の特性に気付いたり、日本文化について発信したりするなどの機会とすることができる。

#### 【中・高等学校】

- コミュニケーション能力の育成と文法指導を対立的にとらえることは適当ではない。ルールとしての言葉の仕組みの理解と、ルールに基づく創造的な言語運用について、両者を関連付けた指導を充実することをめざす必要がある。
- 外国語の学習を通して思考を知覚の対象とし、思考に対して注意を払うことにより、言葉を焦点化したり修飾関係をとらえたりして、メタ言語能力を高め、言葉に対する感性を磨くことが期待される。
- コミュニケーション能力や思考力の向上のためには、言語の基盤となる語彙力の充実が求められる。その際、語彙を機械的に覚えるだけでなく、実際に使用するなど積極的に活用させることが望ましい。

子どもは、英語にふれ日本語との違いに気付く。そして、なにげなく使っている日本語を改めて見つめ直すきっかけとなる。「報告書案」では、小学校では、体験的な活動を通して、言葉の持つ意味、大切さ、日本語との違いに気付かせることの大切さを述べています。また、語彙の少ない英語を使用することから、非言語（表情、ジェスチャー、絵等）でコミュニケーションする重要性も認識することになる。さらに、相手を思いやるコミュニケーションにも発展することになる。中・高等学校では、発表したり感想を述べたり、話し合ったり、議論したり、反省したりする活動を外国語科でも重視することが示されている。また、語彙力の大切さも述べている。今回の改訂で中学校で扱う単語数が、900語程度から1200語程度へと増えている。言葉を実際に使用しながら語彙を増やす工夫をすることが示されている。

#### (イ) 言語活動との関係

小学校外国語活動ガイドブック（文部科学省）に、「聞く活動」「話す活動」「文字指導」「読む活動」「書く活動」などにおいて、留意事項が述べられている。

##### a 「聞く活動」

小学校においては、言葉に慣れ親しむには、まず「聞くこと」からはじめ、早急に「話すこと」を求めず、十分に聞く活動を行うことが必要とされている。

- ・ 目的を持って聞かせる。
- ・ 繰り返し聞かせる。
- ・ 聞くことに集中させる。
- ・ 少しでも聞き取れたことを評価する。
- ・ 聞くものに対する準備や、聞いたものへのフォロー・アップをする。
- ・ 聞いたものを使ってみる活動へつなげる。

##### b 「話す活動」

間違った言い方やあいまいな言い方を否定せず、児童が声を出したことを認める授業環境を準備することが必要とされる。

- ・ 間違いを恐れない授業環境をつくる。
- ・ 話す必然性と楽しさを体験させる。
- ・ 簡単な定型表現を繰り返し利用させる。
- ・ 意味のある繰り返し活動をする。
- ・ 限られた表現を駆使させる。

##### c 「文字指導」

文字の指導については、児童が音声に十分慣れた段階で、しかも、文字を読みたい、書きたいという欲求が生じることが前提となるが、学習時間等児童の負担にならないよう慎重に進める必要がある。音声を中心としながら、「文字遊び」を通して認識を高める。

- ・ 文字になれる。
- ・ 大文字、小文字の識別
- ・ 文字の組み合わせになれる。

##### d 「読む活動・書く活動」

読む書く活動は、学習指導要領の目標を達成し、かつ、児童の状況から指導可能と判断でき、発展的な学習として取り上げる場合のみ行う。英語の音声に慣れた段階で、文字を導入し、読む・書くことの初歩的な活動を導入することは、内容理解を進め、学習を促す効果がある。

- ・ 身の回りの印刷物などの表示に注目する。
- ・ 教室内の身近なものの名前を書いたラベルを貼る。
- ・ 絵カード等を活用したタッチゲームなどを工夫する。
- ・ 読み聞かせの活動をする。
- ・ 文字を書き写す。

小学校外国語活動では、児童に英語嫌いをつくってはならない。しかし、楽しいだけの活動では、やがて児童は飽きてしまう。児童が外国語活動を通して、新たな発見や感動がもてるような活動を行うことが大切である。

#### ケ 特別活動における言語活動の充実

##### (ア) 学習指導要領、報告書案における「言語活動」に関する記載内容

###### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い2

- (1) 学級活動、児童会活動及びクラブ活動の指導については・・・よりよい生活を築くために集団としての意見をまとめるなどの話し合い活動や自分たちできまりをつくって守る活動、人間関係を形成する力を養う活動などを充実するよう工夫すること。
- (4) 学校行事については・・・異年齢集団による交流、幼児、高齢者、障害のある人々などとの触れ合い、自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること。

「よりよい生活や人間関係を築く」ためには、言葉によるコミュニケーションが重要となる。また、指導計画の作成と内容の取扱い2の(4)の「体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること。」は、言語力の育成や体験したことからより多くのことを体得させる観点から加えられた文言である。解説書では、「体験活動では、その場限りの活動で終わらせることなく、事前にそのねらいや意義を児童生徒に十分に理解させ、活動についてあらかじめ調べたり、準備したりすることができるようにするとともに、活動の節目や事後に、話す、聞く、読む、書く、などの活動を効果的に取入れることが求められる。例えば、集団宿泊活動の実施にかかわって、感想文集にまとめたり、お世話になった方々に手紙を書いたり、発表会をしたりすることが考えられる。」と述べている。

##### 「報告書案」7. 教科等を横断した指導の充実の考え方

- 学校や学級における生活上の問題を、言葉や話し合いを通して解決する活動を一層重視する必要がある。
- 人間関係や集団生活の形成に必要な言語力を育成するため、協同の目標の下に行う同年齢や異年齢による言葉の交流活動を一層重視することや、自分や他者の多様な考えをよりよい方向へまとめていくような力を育成することが重要である。  
また、構成的グループ・エンカウンター、ソーシャルスキル・トレーニング、ピア・サポートなど好ましい人間関係やよりよい集団生活を形成するのに必要なスキルを学ぶ場を適宜設けることが望ましい。
- 学級会や児童会・生徒会など様々な会議の方法について、国語科で学習した内容を体験的に理解したり実践したりできるようにすることが考えられる。
- 実生活や実社会で役立つ言語力を育成するため、あいさつや言葉づかいの啓発等を重視することや、地域との交流活動、児童会・生徒会と地域の人々との合同会議などを実施し正しい敬語の活用など言葉によるコミュニケーションを促すことが期待される。  
体験したことを言葉でまとめたり、発表し合ったり、手紙に表したりする活動を一層重

視することが望ましい。

この「報告書案」でも、よりよい人間関係を築くためには、言語を通してのかかわりを重視しなければならないことを述べている。そのために、グループ・エンカウンターやソーシャルスキル・トレーニング等の話し合いを通して人間関係を築いていくスキルを学ぶことが大切であるとしている。また、言語力を育成する際、様々な年齢層の人との交流活動を行うことを進めている。言葉は、使ってみてはじめてその言葉の持つ意味を理解したことになる。考えの違う人に自分の考えを理解してもらうには、豊かな語彙や相手を思いやる言葉遣いが必要となる。

#### (イ) 言語活動との関係

特別活動では、目標を達成するために、体験したことを「振り返り、まとめたり、発表し合ったり、手紙に表したりするなどの活動」を充実させる。好ましい人間関係やよりよい集団生活を形成するのに必要な「話し合い活動」のスキルを学ぶ。正しい敬語の活用など言葉によるコミュニケーションを促す。などの活動を充実させることが大切となる。

また、体験活動も子どもたちに、より多くの感動を与えられる体験にしなければならない。子どもたちが、自ら他の人に「伝えたい」「記録に残したい」と思えるような体験活動にすることが重要である。

#### コ 総合的な学習の時間における言語活動の充実

##### (ア) 学習指導要領における「言語活動」に関する記載内容

##### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 2

- (2) 問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること。
- (3) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取入れること。

上記に示されていることは、学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」には、「互いに教え合い学び合う活動や地域の人との意見交換や交流活動など、他者と協同して課題を解決しようとする学習活動を重視することを意味する。また、言語により整理したり分析したりして考え、それをまとめたり表現したりして自分の考えを深める学習活動を重視するものである」と述べている。

また、「体験したことや収集した情報を、言語により分析したりまとめたりすることは、問題の解決や探究活動の過程において特に大切にすべきことである。そのためには、分析とは何をする事なのか具体的なイメージをもつことが必要」とも言っている。

##### ○分析するとは

- ・ 友だちが集めた情報や記録と突き合わせ、共通点や相違点を見付けだす。
- ・ 同様な傾向にあるものを集めて分類し、それらを比較する。
- ・ 順序や重要度を考えて並べ替えたり、収集した情報の間の関連を見付ける。

##### ○まとめたり表現したりするとは

- ・ 学習課題に沿って情報を取捨選択する。
- ・ 伝えたい内容が読み手や聞き手に伝わるように、文章や発表原稿に書き表す。
- ・ 絵や写真を用いたり、文字の大きさや色を変えるなど、目的に応じてまとめや表現の方法を工夫する。

文章やレポートにまとめることは、それまでの学習を振り返り、体験したことや収集した情報と既存の知識とを関連させ、自分の考えとして整理することにつながる。

### (イ) 言語活動との関係

総合的な学習の時間における探究的な学習とは、問題解決的な活動が発展的に下記の a～d のように繰り返されていく一連の学習活動のことである。その活動の中で言語活動との関連を考えてみると

#### a 課題設定の過程

- ・ 課題設定の理由をワークシートに書き、筋道を立てて理由を説明する。

#### b 情報の収集の過程

- ・ 問題解決のために、関係する本を読む際、むずかしい語句や漢字を辞書で調べながら、読み進める。
- ・ 課題に沿った情報を得るため、図書館やインターネットなどを活用する。
- ・ インタビューなどで話を聞く場合、メモをとる。重要なポイントを記録する。
- ・ 施設見学や訪問する時の電話の話し方や手紙の書き方を考える。(コミュニケーション能力)

#### c 整理・分析の過程

- ・ 集めた情報を取捨選択し、正確に記録に残す。
- ・ 他者が、見て読んで分かりやすい文章表現の工夫をする。
- ・ 友だちと協同して活動することにより、友だち同士理解し合える。
- ・ (表やグラフを用いる。視聴覚機器の活用)

#### d まとめ・表現の過程

- ・ 学級・学年・全校の前で行う発表方法(プレゼンテーション、ポスターセッション、模造紙、新聞、紙芝居、劇など)を工夫する。
- ・ 自分の考えや意見を人に伝える力、表現する力を高める。
- ・ 発表を聞いている児童生徒は、聞く観点を持つ。質問や意見、助言など考えるようにする。

児童生徒が経験や体験を通して感じたり考えたりしたことを、積極的に言語化することで、言葉を磨き、思考の力を育てていくようにすることが大切である。単に、プレゼンテーションを行ったり、レポートを書いたりするだけの活動にとらえてしまうと、総合的な学習の時間のねらいからはずれてしまう。

学習過程が、身近で切実な問題の児童による自力解決の学習(探究的な学習)になっていけば、児童は自ら進んで様々な言語活動を展開していくことになる。

### (6) 学習過程に沿った言語活動の高まりを示す活動

児童生徒に「思考力・判断力・表現力等」をはぐくむために、各教科等で「感じ取ったことを表現する」「理解し、伝える」「解釈したり、説明したりする」「論述する」「評価・改善する」「考えを伝え合う」などの学習活動を行うことの大切さが改善答申の中でも述べられていることは、すでに記述した通りである。例えば「論述する」活動でも、社会科と理科では、教科の特質により違うのである。そこで、各教科等の授業の中で、どんな言語活動をどの学習場面で行えば子どもたちに言語力をつけることができるかを考えていくこととした。

学習過程の流れは、県が推奨している実践モデルプログラムの学習プロセス「見出す→調べる→深める→まとめあげる」の流れを基本に考えてみることにした。

ア 見出す・・・提示された資料から、学習問題が分かり、話し合い活動等を通して自分なりの課題を明確にしていくことで、強い学習意欲がわいてくる段階

イ 調べる・・・課題を解決するための仮説を立て、児童生徒の実態に応じた方法で、様

々な情報を目的意識をもちながら調べていくことで、自己解決力が育つ  
段階

- ウ 深める・・・見通しをもって調べた結果をまとめていくとき、自分の考えだけでなく  
友達の考えを聞き、話し合うことで、思考力を深めることができる段階
- エ まとめあげる・・・話し合い活動等から、自分なりに考えをまとめあげ、それを相手に  
分かるように伝えると共に、分かりやすく記述することで、思  
考を定着できる段階、また、自分の思考過程を振り返る段階

この4段階のプロセスの活動内容（小学校を抜粋）を見てみると、

- ・見出す・・・疑問や不思議に思ったことを書く、疑問に思ったことを取り出しまとめる。
- ・調べる・・・比較・分類する、知りたいことをはっきり話す、情報を収集する。
- ・深める・・・相違点を考える、相手の話を最後まで聞き意見を述べる。自分の考えと比較して聞き意見を述べる、要点をまとめ組み合わせで意見を述べる。
- ・まとめあげる・・・自分の考えを順序よく書いたり話したりする。学習活動を振り返り記録する。自分の考えを整理し筋道を立てて書いたり話したりする。学習活動の成果と改善点を記録する。自分の考えの根拠を明確にして書いたり話したりする。学習活動の成果と改善点をその理由と共に記録する。

これらの活動内容は、言語活動を充実させなければ達成できるものではないと考える。

言語活動例は、言語力育成協力者会議資料で示されている「感受・表現」「理解・伝達」「解釈・説明」「評価・論述」「討論・協同」の5項目ごとに整理した。

この5項目は、「改善答申」で示されている学習活動例と類似していることから、設定した。また、この5項目は、PISA型読解力のプロセスである「受信→思考→発信」とも関連する。感受、理解、解釈、評価は、受信に相当し、表現、伝達、説明、論述、討論、協同は発信に相当すると考える。さらに、千葉県の学力状況調査の課題を解決する手立てとして「情報を整理し、目的に応じて活用する」といったことから分かる通り「受信→思考→発信」という活動が示されている。

ア 感受・表現・・・体験から感じ取ったこと（感動、驚き、疑問など）を、言葉や歌、絵身体などで表現する。

イ 理解・伝達・・・事実、情報を正確に理解し、記述・報告する。

ウ 解釈・説明・・・概念、法則、意図などを解釈し、説明したり活用したりする。

エ 評価・論述・・・事実、情報を整理・考察し、分析したことを論述する。

オ 討論・協同・・・互いの考え方を伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

主な言語活動は、学習指導要領、学習指導要領解説書、改善答申、報告書等の中に記述されている活動を基にまとめた。

この結果、この5項目は、上記のアからオに移るほど言語活動がより高次のものとなると考える。

## （7）言語環境の整備

学校や家庭・地域社会の環境が児童生徒に与える影響は大きい。児童生徒を取り巻く言語環境を整備することは、言語指導の基盤である。学校では、様々な場面で、時と場に応じた適切な話し方を身に付けさせたり、多くの本を読み、美しい言葉や優れた表現に数多く触れることが大切である。

言語環境の整備の大切さについては、国語審議会答申「現代社会における敬意表現」（H12.12）の中で次のように述べている。

言語生活を充実したものとするには、一人一人を取り巻く言語環境を整えることも一方で重要である。「言語環境」とは、言語生活や言語発達にかかわる、文化的、社会的、教育的等の環境を言う。特に子供たちにとって、学校、家庭、地域社会、マスメディア等の言語環境が及ぼす影響は大きいと思われる。したがって、学校教育においては、国語科はもとより各教科その他の教育活動全体の中で、適切で効果的な国語の指導が十分に行われることが必要であろう。また、家庭においては、家族間のコミュニケーションが十分に行われるよう心掛け、発達段階に応じた言葉遣いの指導に留意することが望ましい。さらに、地域社会全体として取り組み、学校、社会教育機関、マスメディア等が連携して、言語環境を総合的に整えることが望まれる。

言葉は個々人のものであると同時に、社会全体のものである。一人一人が人格を形成しより良い人間関係を築き、より良い社会生活を営むためには、相手や場面に配慮した敬意表現の運用能力を身に付け、それを適切に用いていくことが大切である。

上記から、「言語環境とは、言語生活や言語発達にかかわる、文化的、社会的、教育等の環境を言う。」というように、広いとらえ方をしている。学校・家庭・地域社会をはじめ、テレビ・ラジオ、新聞、雑誌など児童生徒を取り巻く言語環境を整備していくことで、児童生徒の言語生活を充実させ望ましい生活環境を作っていくことができるとしている。

整った環境は、児童生徒に安定した精神を育み、学習意欲を喚起し、落ち着いた雰囲気を作り、人格形成にも役立つものである。

児童生徒の言語活動は、言語環境によって影響を受けることが大きいので、学校生活全体における言語環境を整備することが大切である。児童生徒の言語活動を充実させるためには、言語環境を望ましい環境に整備することが重要である。

また、小学校学習指導要領解説 総則編 第5節 教育課程実施上の配慮事項には、次のように述べられている。

各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から一略一言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。

また、言語環境の整備の例として

- ア 教師は正しい言葉で話し、黒板などに正確で丁寧な文字を書く。
- イ 校内の掲示板やポスター、児童に配布する印刷物において用語や文字を適正に使用する。
- ウ 校内放送において、適切な言葉を使って簡潔に分かりやすく話す。
- エ 適切な話し言葉や文字が用いられている教材を使用する。
- オ 教師と児童、児童相互の話し言葉が適切に行われるような状況をつくる。
- カ 児童が集団の中で安心して話ができるような教師と児童、児童相互の好ましい人間関係を築くこと

なお、言語環境をはじめ学校教育活動を通じ、色のみによる識別に頼った表示方法をしないなどの配慮も必要である。また、小学校段階では教師の話し言葉などが児童の言語活動に与える影響が大きいので、それを適切にするよう留意することが大切である。

と述べられている。

上記のことを見てみると、言語環境を整備するにあたっては、文字言語については、「正確で丁寧な文字を書く、適正に使用する」ことが、音声言語については、「簡潔に分かりやすく話す、話し言葉が適切に行われるような状況をつくる、安心して話しができる好ましい人間関係を築く」ことが大切であることが分かる。

学校生活全体における言語環境を整備することは、児童生徒の精神を安定させ、言語を伸ばす根幹ということができる。

#### (ア) 言語環境を整えるに当たっての留意点

##### a 学校における言語環境の実態調査

学校で行われている言語環境づくりが、児童生徒の言語力をはぐくむ上で、適切に表記されたり使われているかを点検し、問題点を探る。

##### b 言語環境の課題・問題点の整理

実態調査で浮かんできた課題・問題点を考察し、どう改善していけばよいか焦点化し、全校体制で言語環境に取り組む体制づくりを行う。

##### c 教育課程に位置付け、継続的な取組

朝の読書活動や音読発表会、図書室の活用など、適切な言語環境を整えるための取組を教育課程に位置付け、継続的に取り組む計画づくりを進める。

##### d 人間関係づくりの取組

何でも言い合え、認め合える学級づくりを進める。

#### (イ) 具体的な取組例

##### a 読書活動の充実

豊かな言葉を習得するには、優れた図書に親しむのが効果的である。いつでも読みたい時に、読める場と機会を作ることが大切である。読書の時間を設定したり、読ませたい本の紹介、優れた感想文の掲示などを行う。また、学級文庫や学年ごとの図書コーナーの充実、児童生徒のニーズに合った本の購入、本の修理などに取り組む。

##### b 話し言葉を磨く

日常的に行われている言語活動は「話す」「聞く」活動である。友達同士の「話し言葉」と授業中の「話し言葉」はちがうものである。授業中に使わせたい「話し言葉」を指導する。例えば、話し方の要点や話型の掲示、1 分間スピーチなどを学年に応じて取り入れる。

##### c 掲示物の工夫

学校内には、児童生徒の作品や行事予定表、各種たよりなどが各所に掲示されている。掲示場所、誤字脱字、季節感、学習過程に即したものなどの配慮をする。また、学級内には、学級目標や児童生徒の個人目標、学習の進め方など学習意欲を喚起するような掲示物の工夫をする。

##### d 身に付けた言語能力を使う場面の設定

学校生活全体を通して、正しい言語を使うことに努める環境を整えることはもちろんだが、授業中では、児童生徒が、単語で答えるのではなく、まとまった言葉を使って答えるような発問の工夫や授業の「はじまり」で、この時間に学習することは何か。「おわり」に、この学習で学んだことは何か。を書く活動を毎時間行うなど言語活動を取り入れる。

## 8 研究協力校の実践の考察

### (1) 浦安市立浦安小学校

#### ア 研究のねらい

浦安小学校では、国語科を研究教科とし、児童に「確かな思考力」を付けるために、語彙を増やし、習得した言葉を活用して、聞き手に分かりやすく話したり、話し手の意図を考えながら聞いたりできる言葉の豊かな児童の育成に取り組んでいる。本年度は、特に「読むこと」に教師の意識を置き、様々な「読むこと」の活動を通して言葉の豊かな児童の育成に取り組んだ。

研究主題 言葉の豊かな児童の育成をめざして ～楽しい言語活動を通して～  
めざす児童像

低学年・・・言葉の楽しさに気づく子

中学年・・・言葉のイメージを広く持てる子

高学年・・・学んだ言葉を学習や生活に活かせる子

特別支援学級・・・経験と言葉を結びつけて生活で使うことができる子

#### イ 具体的な取組

##### 【授業の視点】

##### (ア) ことばの楽しさに気づく取組（低学年）

1年生では、「書くこと」の授業において、親しみやすい絵を提示し、その中からたくさんさんの言葉を見つけ文を作る取組をした。

はじめに、モデルとして取り上げた絵から読み取れる言葉を教師と児童で整理した。その際、「いつ」「どこで」「だれが」「何をしている」の要素ごとに色分けしたカードを使用し、文の構成を分かりやすくした。授業の終末では「いつ」「どこで」「だれが」「何をしている」のゲームを取り入れた。



その結果、絵から情報を得て、考えることができた。例えば「いつ」では、「昼、2時、日曜日、土曜日」など絵から理由付けをして考えることができた。また、モデルとして例示し整理したことで、作り方が分かり、一人で複数の文を作り、4つの構成要素に関して、自分の探した出来事の状態を適切な言葉を選んで文を作ったりすることができた。

本授業では、カードの色分けが効果的であった。日常あいまいな「いつ」「どこで」を意識させることができ、日常会話で「いつ」「どこで」を表す言葉が言えるようになった。生活科などで文を書く機会では、「いつ」「どこ」を示す言葉がスムーズにでてくるようになったなどの成果が見られた。

##### (イ) 言葉のイメージを広くもてる取組（中学年）

4年生では、「詩」の学習において、□に合う言葉を詩人になって考える取組をした。「ゆれる」「おちる」「ころがる」「めをだす」からイメージを膨らませ、詩にあてはまる言葉を増やしていった。



はじめに、イメージを確認し、見通しがもてるように、詩にあてはまる言葉を増やす取り組みをした。その結果、集中して情景をしっかりと限定して、その様子にふさわしい言葉を考えていこうとする姿がみられた。情景を想像する場面では、選んだ言葉から根拠をもって情景をイメージした詩を作ることができた。

自己評価カードから児童が悩んだことが分かり、言葉について考えていることが分かった。また、友だちの意見を聞いて違いに気付いたり、面白さに気付いたりしたなどの成果がみられた。

(ウ) 学んだ言葉を学習や生活に活かす取組（高学年）

5年生の「ことわざをわかりやすく表現しよう」では、ことわざ関連の本や辞典の中から集めさせた。生活体験と関係付けながら、ことわざの意味や使い方が生活のどんな場面に当てはまるか考えをまとめさせた。そして、ことわざをショートストーリーにし、脚本にまとめ、寸劇で発表できるようさせた。ことわざを集める段階で、司書教員と連携がうまくとれ、ことわざの本を多く集めることができた。

発表では、大きな声ではっきりと分かりやすく寸劇を演じていた。5年生の学習指導要領の内容に即した活動になった。

4コマ漫画から寸劇の台本に進むとき、書く活動がしっかりとされ、生活の中でことわざを使う児童が見られるようになったなどの成果が得られた。



(エ) 国語辞典を活用し、語彙を増やす

3年生以上では、主に「調べる」場面で国語辞典を活用できるよう、児童の手の届く所に国語辞典を準備し、活用した。授業中、意味の難しい言葉や新出漢字が出てきた時に、国語辞典で調べさせ、児童に説明させるなど主体的に言葉にかかわるようにした。

国語辞典を活用する取り組みを継続した結果、辞典を引くことに対する抵抗がなくなり、解らない言葉や漢字を調べたい時は、進んで辞書を引くようになった。詩の授業では、調べた漢字を使った言葉集めや文作りを行ったことにより、正しい言葉遣いができるようになり、語彙が豊かになり表現力が高まった。

(オ) 紙芝居

大きな声で気持ちを込めて発表できるようにすることをねらいとして、4年生では、総合的な学習の時間を使って紙芝居の学習を行った。脚本家の先生を特別非常勤講師として招き、郷土浦安を題材にしたものを作ってもらい、児童が絵を描き学習発表会で発表した。



10月後半から20時間かけて製作、練習、本番となっている。本番を迎え、お客さんに言葉を届け、役になりきることができ終了後の表情は満足感が表れていた。

(カ) 俳句の授業

生活の中で風景を切り取り、言葉を選びイメージを表現するために、4・5・6年生を対象に俳句作りを行った。学年に応じて言葉集めを行い、俳句を作り、よい作品は、言語環境として校内に掲示した。



(キ) 他教科等でも「言語活動」を意識した授業を行う

国語科以外の教科等でも、「書く活動」や「話し合い活動」を積極的に取り入れた授業を行った。理科の観察や算数の考え方などノートやカードに書く活動や発表を多く取り入

れたことにより、習得した語彙を活用して、自分の言葉で表現しようとする姿が見られるようになった。

新1年生に、本を読んでもらうために、5・6年生が絵本の「帯づくり」を行った。児童は、紹介したい本をじっくりと選び、下級生が手にとって分かるか考えながら活動した。



また、早く終わった児童は紹介カードも書いた。できあがった作品は、すぐに展示して意欲化を図った。

本への関心を高めるために全学年を対象に「しおりコンクール」を行った。司書と児童のコミュニケーションを深める活動にもなり、本への話題のきっかけにもなった。

音楽科では、歌唱指導の際に、歌詞の意味を理解し、歌詞の内容からイメージできる情景を話し合う活動を行った。一つ一つの言葉を大切に扱い、ペープサートを利用して情景のイメージを説明していくことで、全体のイメージを鮮明につかんでいこうとした。この活動を通して、言葉や歌詞の内容を味わいながら歌うことの楽しさを体感できた。

#### 【授業以外の視点】

○「言葉の土台」をつくるための言語環境

##### (ア)「朝の読書」と「音読の時間」

言葉を豊かにする土台として、週3日、朝のチャレンジの時間（10分）を使って読書や音読を行った。はじめは、音読の教材サンプルを図書館司書と協力して選出し朝読書へのきっかけづくりをした。

音読を継続して行ったことにより、教材（詩）のもつリズムや表現のよさに気付き言語感覚が磨かれてきている。読書については、他の時間でも本を読む姿が見られるようになった。また、10分は短い。書く活動も取り入れたいという意見がでてくるまでになった。

##### (イ) 学校図書室の活用

児童の読書活動の活用だけでなく、学習の発展としての調べ学習としても図書室の活用を図った。司書教諭により読み聞かせ（本の紹介）・選書・読書の一連の流れで行った。読み聞かせは、読書量を増やすことをねらったものである。また、各階の廊下に可動式のラックを置き、調べ学習用の図書資料、辞書などを集めておいた。学年によって朝読書の本を置く学年もあった。フリースペースにラックを設置し、自由にすわって本を読めるようにした。

##### (ウ) 教師の振り返り

目指す子ども像にせまるために、教職員が日々の言語活動を大切にし、児童を評価する指標とすることを目的に教師の振り返りを今まで5回実施した。実施した活動や取組や児童の変容を自由記述で記録することとしている。成果と課題を明らかにしていったことで、教職員の意識を高めることに役立っている。

振り返りの視点として、年間を通して言語活動を充実させることをねらい、朝読書、音読、その他の言語活動の項目で実施した。

#### ＜振り返りの具体例（1年2組児童の変容一部抜粋）＞

|      | 朝読書                               | 音読                                  | その他の言語活動                              |
|------|-----------------------------------|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 5/21 | ・絵と耳から聞こえてくるお話に集中して作品の中に入り、反応がよい。 | ・色鮮やかに表現された詩をリズムにのって読んだ。暗唱もしやすいようだ。 | ・言葉集めをして、互いの意見をきっかけに、言葉が増えたり、広がったりした。 |
| 6/18 | ・目はお話に集中。お話を楽しむ                   | ・教科書教材を全員が暗唱でき                      | ・短い文章で一文一文を丁寧に音                       |

|      |                                                                  |                                   |                                                   |
|------|------------------------------------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------------------|
|      | 耳が育ってきている。<br>・少しずつ長いお話（幼年童話）<br>の読み聞かせを始めた。                     | た。リズムカルで展開が楽しい<br>ようだ。            | 読してくる子が多い。                                        |
| 7/17 | ・幼年童話を集中して聞くことが<br>できるようになった。<br>・ストーリーテリングは昔話を中<br>心に楽しむことができた。 | ・遊び歌、劇遊び、を2週で取<br>り組み、暗唱することができた。 | ・「て・に・を・は」は連絡帳や<br>ミニ作文で繰り返し練習し、適切<br>に使えるようになった。 |

## ウ 成果と課題

### <成果>

#### 【授業の視点】

低学年では、詩を音読する機会を作ったので、詩を覚え、たくさんの言葉にふれることができた。言葉の使い間違い、書き間違いは少なくなった。文章を書くことに抵抗感が少なくなってきた。全体的に作文力が伸びたり、スピーチで最近の出来事を話すようになってきたりなどの成果がみられた。

中学年では、いろいろな本を読める児童が増え言葉や知識が格段に増えた。一つの言葉から新しい言葉を連想したり、頭の中でイメージを作ったりすることが上手になってきた。

分からない言葉を、国語辞典で調べたりする児童が増えた。口を大きく開けることや聞き手を意識して抑揚をつけた話ができるようになってきた。理科や算数の考え方などノートやカードに書く活動や発表を多く取り入れると、表現方法を工夫するようになったなどの成果がみられた。

高学年では、児童の音読の力が伸び、自分たちでリズムのある音読を作れるようになってきた。分からない言葉を国語辞典で調べるようになり、進んで音読するようになってきている。中位の児童が難しい漢字の多い社会科の教科書をスムーズに音読できるようになってきた。

#### 【授業以外の視点】

上学年の図書の貸し出しの分類に差が見られてきた。特に9類(文学)において読書量が増え、4年生では1.8倍、5年生では、1.6倍、6年生では1.8倍の貸し出しになり、長文を読む傾向が増えてきている。

低学年では、言葉クイズへの反応がよくなり、言葉遊びの本を理解して喜ぶ姿が見られ、シリーズの絵本を完読するようになった。また、読み聞かせのため、教職員への貸し出しが増えた。

高学年では、長い本にチャレンジする児童が増えた。読む本を迷う児童に、読書量の多い児童がアドバイスする姿が見られた。辞書の活用が増えている。

### <課題>

#### 【授業の視点】

授業として、語彙を増やす活動を継続していく必要がある。また、生活の中で活用していきける場を工夫する。読むことだけでなく、書くことにも力を入れることなどが課題としてあげられている。

研究体制として、めざす児童像の見直しを図る。児童の変容を評価する視点を探る。教職員の共通意識をさらに深め、意識を高める。さまざまな言語活動とリンクさせ、単独の言語活動ではなく、つながるように、教育課程に位置づけていくことなどが課題とされている。

#### 【授業以外の視点】

読む本の分類に多様性がでてくるとよい。読書指導を充実させていく。児童の作品を校内

言語環境に積極的に取り入れるなどが課題としてあげられている。

## (2) 印西市立小林小学校

### ア 研究のねらい

小林小学校では、「主に国語科と理科の言語活動の充実により、自分の体験からの気づきを言葉に置き換え、表し、思いや考えをお互いに伝え合うことができる児童」の育成に取り組んでいる。

#### 研究主題

『気づく 思いや考えをもつ 伝え合う』言語力の育成  
～国語科・理科における言語活動の充実～

### イ 具体的な取組

#### 【授業の視点】

#### (ア) 育てたい言語力と言語活動の一覧表の作成

国語科・理科において、育てたい言語力を明確にした上で言語活動として、どのような内容があるかを検討し、言語活動一覧表として作成した。

さらに、言語活動を指導計画に適切に位置付けることにより、授業の中で意図的な言語活動の充実が図られ、言語力を育成することができるであろうと考えた。

#### 【言語環境一覧表例】

国語科 言語活動一覧表（高学年）

| 領域      | 系統      | 言語活動                                                | 育てたい言語力                                                          |
|---------|---------|-----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| 話す・聞くこと | 話題設定や取材 | ○世の中の動きや自分で体験したことなどから話題を決める。<br>○テーマについて資料となる物を調べる。 | ・考えたことや伝えたいことなどから話題を決める。<br>・収集した知識や情報を関係付ける。                    |
|         | 話すこと    | ○自分の考えを資料を提示しながらスピーチをする。                            | ・目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら話す。<br>・相手の立場や場を考え、適切な言葉遣いで話す。 |

理科における言語活動一覧表＜中学年＞

| 領域   | 学習過程                          | 言語活動                                                                                                 | 育てたい言語力                                                                                 |
|------|-------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 読むこと | 課題把握<br>観察・実験<br>調べ学習<br>予想考察 | ①自然の事物・現象から必要な情報を興味、関心を持って読み取る。<br>②グラフ、図表から情報を読み取る。<br>③図鑑やインターネットの資料などから情報を読み取る。<br>④友達の考えや記録等を読む。 | ・観察・実験のねらいをつかむこと。<br>・五感を使い、情報を読み取ること。<br>・学習課題について、情報を取り出すこと。<br>・自分の考えや記録と比較しながら読むこと。 |
| 聞く   | 課題把握<br>観察・実験                 | ⑤自然の事物・現象から必要な情報を興味、関心を持って聴き取る。                                                                      | ・観察・実験のねらいをつかむこと。<br>・五感を使い、情報を読み取ること。                                                  |

### (イ) 辞書の活用

授業中、常に机上に辞書を用意させ、分からない言葉や文章表現などを主体的に調べられるようにし、語彙の拡充に努めるようにした。また、調べた言葉については辞書に付箋をはらせ、辞書の活用への意欲化を図るようにした。

### (ウ) 話型の活用

教師が話し方の手本を示すとともに、話型の例を掲示し、それに基づいて話すように促すことにより、話し方や話すことに対する関心が高まり、より良く伝え合うことができるようになる考えた。

【話型例】

低 学 年

きたえかた  
 ○「はい。○○です。」  
 ・おおきな くちで  
 ・おおきな こえで  
 ・さいこまで、はつきりと  
 みんなの こたえかた  
 ○「おなじです。」  
 ○「ほかにあります。」  
 ききかた  
 (しつものん しかた)  
 ○「どうですか。」  
 (じぶんの はつびようの あとに)  
 ○「○○さんに しつもんがありま  
 す。」  
 ○「もういちど いってくださあ。」  
 (わからないとき)  
 ・はなすひとを みて  
 ・うなずきながら

| はなすとき                                                                                                                                                                                   | きくとき                                                                                                          | はなしあい                                                                                                                                                                      |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>☆はい、○○です。</p> <p>☆わたしは、○○だとおもいます。</p> <p>そのわけは、くだからです。</p> <p>☆わたしも、△△さんとおなじです。</p> <p>☆ほかにもあります。</p> <p>わたしは、くだから、◎◎とおもいます。</p> <p>☆つけたします。わたしは、くもあるとおもいます。</p> <p>はつきりはなしましよう。</p> | <p>☆はなすひとのめをみて</p> <p>☆うなずきながら</p> <p>☆はなしがおわるまで</p> <p>め、みみ、ころろをはたらかせて</p> <p>さいごまで、しつかりと</p> <p>ききましよう。</p> | <p>☆○○について、△△さんはどうおもいますか。</p> <p>☆わたしは、○○とおもいます。</p> <p>☆どうして、○○とおもったのですか。</p> <p>くわしくはなしてください。</p> <p>☆そのわけは、○○だからです。</p> <p>☆これで、はなしあいをおわります。</p> <p>たのしく、はなしあいましよう。</p> |

### (エ) 図書館のリファレンス機能の活用

単元に関連する図書を用意することにより、調べ学習の充実を図ったり、発展的に考える手がかりとなるようにしたりして、児童が興味関心をもって学習活動に取り組めるようにした。

(才) その他

### ○ノートの効果的な活用

教科の特質に応じたノートの書き方を指導し、学習内容や自分の思考の流れ等が分かるノート作りができるようにした。

○読解力の向上

音読活動を取り入れるとともに、大切な言葉や文章にサイドラインを引いたり書込みをしたりする活動の充実を図るようにした。

【授業以外の視点】

(ア) 人的な言語環境づくり

＜教師の取組＞

○適切な言葉遣い

適切、正確、丁寧、温かい言葉遣いを心がけ、自分自身の話し方をテープに録音して聞き直したり、児童や同僚から意見を聞いたりして、改善に努める。

○板書での配慮

正確で丁寧な板書をするために、板書計画を立てる際、筆順の確認をするとともに、色チョークの使い方や黒板での提示の仕方なども含めて考えるようにする。

○ワークシート等への評価の配慮

ワークシートや児童の作品への評価で、丁寧な文字で具体的な賞賛の言葉を入れるとともに、誤字・脱字や文章表現などの指導も加えるようにする。

○児童の話をよく聞く

授業中や休み時間など、児童の話に真剣に耳を傾け、話の聞き方の模範となるように努める。

○言語の支援が必要な児童への配慮

語彙の不足や理解に時間がかかるなどの児童の実態に応じて、平易な言葉での言い換えをしたり、具体物・絵や図を用いたりして、学習活動の支援をする。

＜全校での取組＞

○あいさつの日常化

あいさつの日常化により、豊かな言語環境と人間関係作りの基盤を整える。

(イ) 物的な言語環境づくり

＜教室環境の整備＞

○学習の過程・これからの活動が見える掲示を工夫する。

○意図的・計画的に言語感覚、色彩感覚など様々な感覚を育てるような掲示を工夫する。

＜図書館の整備＞

○市の図書館との連携によるリファレンスサービスの充実。

○図書館の蔵書整備。

ウ 成果と課題

＜成果＞

○ 国語科及び理科における言語活動一覧表を作成することで、国語科や理科における言語活動や育てたい言語力が明確になり、見通しを持って計画的に指導・支援にあたることができた。

○ 国語科や理科の指導目標を達成するため、また、思考力・判断力・表現力を育成するために、言語活動の充実を図るという認識を持って、指導・支援にあたることができた。

○ 言語活動充実のための手立ての工夫が図られるようになった。具体的には、ワークシートの工夫、書画カメラ等の機器の活用、個→グループ→全体と広げていくような表現の場の工夫等が図られるようになり、児童が積極的に言語活動に取り組めるようになった。

- 児童が発表を録音して聞いたりすることで、自分の発表を客観的にとらえ、考えが相手に伝わるように分かりやすく表現できているか、フィードバックさせることができた。そのため、改善を進める活動の中で、言葉や表現方法に対する感覚やそれを的確に伝えようとする技能が精選されていった。
- 児童が辞書を活用しながら話し合いを進める姿が見られた。言葉に関心を持っている現れであり、辞書の活用が日常化されてきている。
- 作文の推敲の学習を、自分が書いたものを読み返して直す習慣づくりにつなげることができた。
- 観察・実験の結果を整理し考察する学習活動の充実を図るために、記録の仕方やまとめ方を掲示し、指導に役立てることができた。
- 市の図書館との連携により、学習で使う図書や関連する図書をたくさん用意することができた。児童も、たくさんの本を手にとって読む中で、読書の幅を広げることができた。

#### <課題>

- 子どもの意識と教師の意図にずれがあった。言語活動の目的や内容に応じて、教師からの提示や指示の仕方をさらに工夫する必要がある。
- 文章がそれほど抵抗なく書けるようになってきた。しかし、推敲は、スモールステップで、観点を絞りながら繰り返し指導を行い、身につけさせる必要がある。
- 言葉に基づいた動作化をさせるために、できている児童を賞賛して他の児童へ広げたり、教師の真似をさせたりして、段階を追って指導する必要がある。
- 誤った解釈も含め、いろいろな解釈を受容し、教師の解釈を押し付けることのないように、十分な時間をかけて話し合わせる必要がある。
- 子どもの実態、単元内容、本年度の実践内容等をふまえ、言語活動一覧表を改訂していく必要がある。
- 成果の検証方法として、思考力・判断力・表現力の向上を図る手段を考えていく必要がある。

### (3) 袖ヶ浦市立蔵波小学校

#### ア 研究のねらい

蔵波小学校では、「言語力とは、知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行なうために言語を運用する（話す・聞く・読む・書く・思考する）のに必要な能力」ととらえ、研究に取り組んでいる。

#### 研究主題

「言語力」を育てる学習指導のあり方 ～国語科、社会科、理科、生活科を通して

#### 日常的な視点

- (ア) 国語科においては、漢字、語句などの基礎基本的な事項の定着を徹底する。
- (イ) 国語科のみならず、すべての教科、領域において「音読」を重視する。
- (ウ) すべての教科、領域において、「自分の考えを書く」指導を行う。特に学習の振り返りにおいて、自分の経験や既有知識と結びつけて書かせる。
- (エ) すべての教科、領域において、因果律の説明スタイルで意見を述べる（書く）ことができるようにさせる。
- (オ) 学校図書館を積極的に活用する。

## イ 具体的な取組

### 【授業の視点】

(ア) 国語科：主体的に読み書く子を育てる学習指導のあり方 ～出版学習を通して～

言語力は教育活動すべてにおいて育てていくものであるが、国語科はその活動を支える。特に学習の基盤となる《読む力・聞く力・話す力・書く力》を鍛える教科である。中でも、「読む力」「書く力」はどの学習にとっても根幹を成すものである。また、「読む力、書く力」を「読み取ったことをもとに、自分の考えを書く力」と押さえて本研究に取り組んだ。

#### ○ 読む力への取り組み

1・2年生の授業実践では、「音読」を重視した授業を展開した。1年生では、毎時間音読を取り入れたことにより、書かれている事柄を正確に読み取ったり、文型を理解できるようになった。2年生では、すらすら読めるというねらいのもと、単元指導計画の早い段階で「読む活動」だけの時間を設定した。更に、1単位時間の流れの中では、「追いかけて読み、まる読み、一斉読み、個別読み、指名読み等」変化をつけながら音読を位置付けたことにより、書かれている事柄を正確に読み取れることができた。

5年生の授業実践では、付箋や印をつけながら読んだり、メモを取りながら読んだりする方法を体験させることにより、単に読むという活動から、書かれていることを整理し活用するという学習へと結びつけることができた。



#### ○ 書く力への取り組み

低学年の授業では、視写を「つかむ、深める」段階で効果的に取り組ませることにより、記述されている文型パターンに沿って書けば、簡単に書けるようになってきている。

高学年においては、読み手を意識した活動（出版記念パーティーをしよう。蔵っこ祭りに出品しよう。）をさせることにより、見出しや要点のまとめ方、レイアウトが工夫されるとともに、子どもたち自身の思考や論理が整理され表現されるようになった。

(イ) 社会科：調べたことや考えたことを自分の言葉で表現できる子を育てる指導

社会科における言語力とは、社会事象の観察や調査、見学などの体験的な活動に基づいて、調べたことや考えたことを自分の言葉で表現する力ととらえた。それは、単に言葉を巧みに使えることを言うのではなく、確かな根拠に基づいて、調べたことや考えたことを自分の言葉で発表したり書いたり、話し合ったりする表現活動であり、このことを重視し実践した。



3年生の「人々のしごとと私たちのくらしーコンビニで働く人の仕事ー」の単元では、コンビニの平面図を各班に持たせ、そこに気付いたことを付箋に書き貼り付ける活動を取り入れた。子どもたちは、いつも活用しているコンビニを漠然と見るのではなく、各コーナーごとに工夫されている点などを探し出し、気付いたことを付箋に書き込んでいった。この活動を取り入れたことにより、意欲的に学習に取り組むとともに、自分の意見として整理して発表することができた。

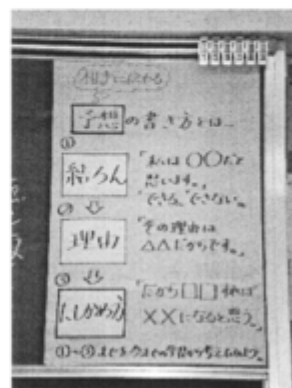
6年生の「新しい日本、平和な日本へ」の単元では、第1時に『学徒出陣』と『東京オ

リンピック』の写真を比較し、話し合いをもたせ「およそ20年の間になぜ日本は大きく変化したのだろうか」という学習問題を設定することができた。このことから、調べ学習に積極的に取り組むことができ、分かりやすくまとめ、資料を活用しながら説明するようになった。このような、適切な資料による話し合いを今後も積み重ねていきたい。

(ウ) 理科：観察・実験の予想や結果を整理し、分かりやすく伝える表現方法のあり方を追求する。

理科では表現の仕方を工夫して、実験の予想や結果を整理し分かりやすく伝えることに重点を置く。このような活動を通して科学的な思考が高まり、言語力の育成につながっていくと考え実践した。

3年生の「豆電球にあかりをつけよう」の単元では、電気を通す物にはどんなものがあるだろうかという学習問題に対し、各々ワークシートに自分の予想を書かせた。予想を書くにあたっては、①結論「私は〇〇が△△になると思います。」②理由「それは××だからです。それは◎◎になるからです。」という基本形を掲示し、理論づけて説明できるようにした。



6年生の「水溶液の性質」では、見えなくなったアルミニウムは、どうなったのだろうかという学習問題に対し、アルミニウムは試験管内に残っている説と残っていない説に立場を明確にすることにより、集中して授業に取り組むことができるとともに、「〇



〇だから～になるはずだ。」そのためには、「××の実験が必要である。」という論理の組み立てができるようになった。

理科における言語力の育成に対して、理科用語を適切に使用することが大切である。そのために、理科用語の掲示等の工夫が必要である。3年生の「豆電球にあかりをつけよう」では、「回路」「導線」「+極」「-極」等の用語を掲示し、予想、発表、まとめに活用する手立てとした。このように、理科用語を各単元ごとにまとめ掲示することは表現力の向上につながるものである。

(エ) 生活科：活動や体験したことを伝え合う力を育てる指導法の研究

生活科では、①目的意識をはっきりさせる②効果的な伝え方・技法などを与えていく③試行錯誤や繰り返す活動を大切にすることの3点に重点を絞り実践した。

1年生の「だいすきだよ」の単元では、発表のための手立てとして、事柄を順序だてて



説明できるようにするために、番号を振ったり、「始めに」「次に」「それから」「最後に」などといった順序を表す言葉を意図的に使い、分かりやすく説明できるようにさせた。この順序を表す言葉は、国語科の「はたらく自動車」での学習が生かされている。

2年生の「おもちゃランドをひらこう」では、チラシ作りや遊び方の説明書きに取り組ませた。チラシを配る相手をはっきりさせることにより、PRポイントやキャッチコピーが工夫されたものとなった。

また、遊び方の説明書きでは、順序良く簡潔に書かせることにより、言葉を選んで書くという活動となった。

【授業以外の視点】

(ア) 読書活動の推進

a 読書タイムの定着

- ・毎週月・火・水 8時10分～8時20分
- ・内容 読み聞かせ 自由読書

10月は読書強化月間各学年で  
テーマを決めて戦略的に朝読書

b お話会の開催

- ・各学年年1回 ボランティアの方による「語り」「読み聞かせ」を聞くお話会

(イ) 読書環境の整備

a 読書指導員の配置 いつでも明るく温もりのある学校図書館

b レファレンスサービスの活用・・・市内図書館・学校図書館との連携を図り、学習資料や読書材を収集する。

袖ヶ浦市物流ネットワークシステム

c インターネットの活用 図書館にパソコンの配置

(ウ) 集会活動の充実

a 全校群読「カップ」 学級群読「麦畑」・・・教師自ら練習を重ねて

b 理科研究論文の発表 成果を全校に紹介するとともに、質問にも対応する。

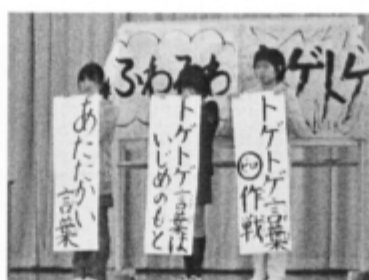
c 児童会の話 聞き手を意識して視覚からも訴える。

d インタビューを組み込む 双方向のコミュニケーション

(エ) 読書集会 お話レストラン 全校群読や各教室での全教師による読み聞かせ



〔全校群読「カップ」〕



〔児童会からの話〕



〔お話レストラン〕

ウ 成果と課題

＜成果＞

(ア) 読む活動

- ・低学年においては指導計画の中に、読む活動を重点的に行なう時間を確保し、文章をすらすらと読めるようにした。その結果、書かれている事柄を正確に読み取れるようになった。
- ・資料を読みながら、付箋を使ったり、メモをとったりする活動を取り入れることにより、書かれていることが整理され活用できるようになった。

(イ) 書く活動

- ・基本的な文型を示すことにより、書く抵抗が少なくなり、自分の考えを書けるようになった。
- ・目的意識をはっきりとさせることにより、順序良く、精選した言葉で書くようになった。
- ・各教科の専門用語は掲示したり、教科書にラインを引かせたりすることによって、用語を使えるようになってきた。

(ウ) 話す活動

- ・ 気が付いたことを付箋に記入したり、メモにとったりすることによって、意見を発表できるようになった。
- ・ 基本的な話型を示すことにより、話す抵抗が少なくなり、自分の考えを話せるようになった。
- ・ 学年発表や全校集会などを活用して、話す場の確保をすることにより、意欲的に取り組めた。

#### (エ) 聞く活動

- ・ 読書指導員やボランティアによる読み聞かせ、お話レストランによる教師の読み聞かせ等により、子どもたちの読書活動に対する向上が図られている。

#### (オ) 言語環境

- ・ 学校図書館を日常の学習に活用できるように整備することにより、いつでも子どもたちが足を運ぶ学校図書館となってきた。

#### <課題>

- 各教科における言語力の定義をはっきりさせる必要があるのではないか。
- 全体としての成果をどのように出していくかが課題である。
- 言語といっても、話し合い、読み書きなど範囲が広く、どこに力を入れるべきかとまどっている。
- 言語を全面に出すことで、型ばかりに目がいきがちになってしまっている。
- どのような時に言語力が育ったのか、という評価が難しい。

### (4) 長柄町立長柄小学校

#### ア 研究のねらい

長柄小学校では、「国語科、算数科、外国語（英語）活動において、まとめる力や発表する力を身につけながら、自分から意欲を持ち、自分なりの見方や考え方を自分の言葉で相手に分かりやすく話したり、相手の話をしっかり聞いたり、互いに話し合ったりすること（表現）ができる児童」の育成に取り組んでいる。

研究主題 自ら学び表現できる児童を育てる指導法の工夫  
～国語科・算数科・外国語（英語）活動の授業実践を通して～

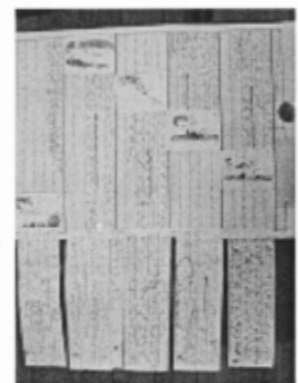
#### イ 具体的な取組

##### 【授業の視点】

##### (ア)「書く活動」を重視する。

低学年の国語の授業では、「調べる」場面において、児童が自分の考えを整理して発表にいかすことができるよう、「吹き出し」に書き込むことができるプリントを活用した。また、「まとめあげる」場面では、児童個々に今日の学習で分かったことを「短冊カード」にまとめたことにより、一人一人が自分の言葉で、考えや思いを文章で表現する力が養われてきた。

中学年の算数の授業では、「調べる」場面で、グループ内で自分の考えを話し合う前に、考えを書く時間を設けたことで、理由を付け簡潔に自分の意見を友だちに伝えることができた。その際、国語の説明文で学習した「まず」「次に」「最後に」といった「つなぎ言葉」を活用し、分かりやすく発表することができた。また、「まとめあげる」場面では、「振り返りカード」を活用し、今日の学習で分かったことや疑問点などを書き、自己評価としている。



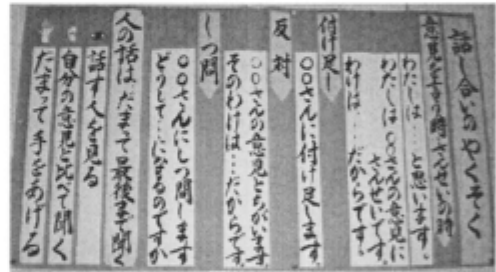
（短冊カード）

(イ) 動作化を取り入れる。

低学年では、「調べる」「深める」場面で、登場人物の気持ちや情景を豊かに読み取るために、登場人物の様子を動作化させたりペープサートを活用したりして、イメージを広げ言語で表現する時の手立てとなった。

(ウ) 「話型」を取り入れた「話し合い」活動を展開する。

発表への抵抗感をなくし、根拠をはっきり話したり自分の考えと比較しながら聞いたりすることができるようにするために、「話し方・聞き方、話し合いのルール」を、児童の発達段階に応じて、低・中・高学年別に作成して教室に掲示し、この「話型」を常に意識させた話し合い活動を行った。



低学年では、自分の考えを発表する時、「～です」「～とおもいます」とはっきりと話せるようになった。友だちの意見に対しては、「わかりました」「私もそう思います」「他にもあります」など、聞いている児童が、必ず言葉を返すことにより発表しやすい雰囲気をつくることができた。

(高学年・話し合いの約束)

中学年では、主に「調べる」場面や「深める」場面での、グループ内での話し合いや全体での発表において、「～だと思えます。そのわけは、・・・と思ったからです」「つけたします」など、発表者が、「なぜ、〇〇と考えたのか」「なぜ、～と思ったのか」といったことを意識し、自分の意見を簡潔に根拠を付けて述べるできるようになった。

この取組は、言語環境の整備とも関連しており、すべての学年・教科等で取り組んでいる。

(エ) 小グループでの話し合い活動を効果的に取入れる

中学年の算数の授業では、話し合い活動を活性化するため、3～4名の小さなグループを作り、話し合い活動を積極的に行った。4年生は、「調べる」場面で、グループの中で個々の意見を発表し合い、よりよい考えをグループの意見として発表させた。自分ひとりでは、自分の考えをまとめきれなかった児童や理由を言葉で表すことができなかった児童も、小さいグループ内で話し合うことで気付きや理解が生まれてきた。また、グループ内で受け入れられたことで、意欲化が図られた。

(オ) 「音読」を取り入れる。

低学年の国語の授業では、「見出す」場面で、一斉の音読により、場面のあらましを想起させ、学習の見通しをもたせることができた。「まとめあげる」場面では、指名読みを行い、登場人物の気持ちが分かるように工夫させた。少しずつ、文のまとまりを意識したり、読む速さ、強弱などをつけた表現ができるようになった。

(カ) 具体物・半具体物を活用する。

中学年の算数の授業では、「調べる」「深める」場面で、具体物や半具体物を操作することにより、自分の考えやグループの考えをまとめていくときに有効であった。また、発表するときにも具体物等を実際に操作しながら分かりやすく説明することができた。

(キ) コミュニケーション活動を充実させるため、「ヒントカード」「ピクチャーゲーム」などを活用する。

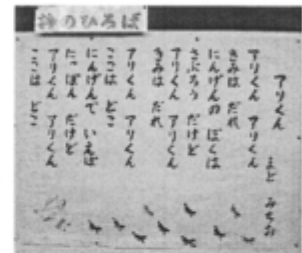
5年生・6年生の英語活動では、「導入と展開」の場面で、今までの学習を振り返ることのできる「ヒントカード」を活用したことにより、英語に自信のない児童も安心して話することができるようになった。また、言葉で表現することが苦手な児童は、絵で表現する

ことでコミュニケーションをとることができた。

#### 【授業以外の視点】

##### (ア)「言葉の知識」を増やすための環境

「漢字の読み、書き順」「言葉の意味」や「詩の広場」のコーナーを設置し、語彙を増やしたり基本的な言葉の使い方や漢字の成り立ち、詩独特の表現に興味・関心をもたせたりするための掲示を工夫した。



##### (イ) 面積や体積を体感させる環境

1 m<sup>2</sup>の量感を養うために、校庭に続くアスファルト上に2色のペンキで1 m<sup>2</sup>の正方形を描き、その上で、「何人立てるか」と遊んだり、2階のベランダから見たりした。また、立方体をイメージさせるため、廊下の一角に工作用紙で作った立方体の展開図を置き、自由に操作できるようにした。その他、m l, d l, lのかさの量感と相互関係が一目で理解できるような図(写真入り)を掲示した。

##### (ウ) 生活と密着した英語の環境

教室や廊下などに、英語コーナーを設置し、今日の日付・曜日、天気、色、ものの名前等を書いたカードを掲示し、日常生活の中で英語への興味関心を高める工夫をした。

##### (エ) 日常的に読書に親しむ環境

児童に望ましい読書習慣を付けるために、「朝の読書時間」に、学校ボランティアによる「読み聞かせ活動」を行っている。また、図書館の活用では、「本の紹介コーナー」を設置し、「課題図書の紹介」「こんな本読んだよ～すすめたい本の紹介」「買ってほしい本の募集」などを行い、読書意欲の向上を図った。

## ウ 成果と課題

### <成果>

前項に示す具体的な取組により、「表す力」「考える力」などが少しずつ付いてきていると考える。

#### (ア)「表す力」「考える力」を高めるための「話し合い活動」「書く活動」「読む活動」

- a 主に「調べる」「深める」学習場面において、意図的に話し合い活動を取り入れたことにより、意見交換をすることができるようになり、それぞれの考えを比較検討する必要性を理解し始めてきている。

話し合いは、児童の発達の段階を考慮し、教科・内容・場面などを検討し児童の実態に即した活動を行った。また、「話し合いのルール」を作成し、低学年から指導をしたことにより、自分の考えを自分の言葉で発表する楽しさ、友だちと話し合うことの楽しさを感じることができるようになってきている。中学年(算数)の学習過程別の意識調査でも、「深める」学習場面にあたる「考えを発表・友だちの意見を聞く」事項の調査項目が、「好き・どちらかという好き」の割合が、3年生では、76 %から 91 %に、4年生では、52 %から 78 %に増えている。その理由も「友だちの意見を聞くことができるから」「他の方法を聞くことができる」と答えている児童が多いことからうかがえる。

話し合い活動を積極的に行ったことにより、自分の言葉で表現する力(表す力)や友だちの良い意見を参考にして自分の考えをより広がりのあるものにする力(考える力)が付き始めてきたと考える。

- b 主に「まとめあげる」学習場面において、自分の考えや感想を書く活動(振り返りの活動)を、全学年で、できるだけ多くの教科で取り入れたことにより、自分の考えを整

理しまとめる力（考える力）が付いてきたと考える。

書く学習活動を行うに当たっては、低学年では、児童の書くことに対する抵抗感を除くために、吹き出しや短冊カードなどのワークシートの工夫を行っている。また、板書や教科書の視写の時間を取ることで、長い文もはやく書けるようになってきている。3年生では、「はじめ・中・終わり」の書かれたプリントを活用して順序立てた文章を書くことができるようになった。

また、主に「深める」学習場面では、話し合う活動をする前に、自分の考えを整理しまとめるための書く活動を取り入れたことにより、考えた根拠や理由をしっかりと述べる力（考える力・表す力）が付いてきたと考える。

中学年の算数科の意識調査において、「まとめたり分かりやすく発表したりする」場面を、「どちらかという嫌い」「嫌い」の割合が他より多い。理由は「むずかしい、はずかしい」というものである。算数科でも、自分の考えをまとめるための「文章の形」を指導し、「書く活動」をより充実したものにするにより、必要なことを簡潔に表現することができるかと考える。

- c 低学年の国語科の音読活動を、各学習場面で効果的に取り入れたことにより、登場人物の心情や情景を考えた読み方ができるようになってきた。物語から感じたことを表現する力が付いてきていると考える。

#### （イ）「言語力」の土台となる言語環境の工夫

言語活動の基盤となる言語環境を整える取り組みは、特に新しい試みではないが、常に児童の視覚や聴覚などに訴える環境を整えることが大切と考える。

- a 教室内に「話し方・聞き方」「話し合いのルール」や国語科の説明文の単元で学習した「つなぎ言葉」を掲示し意識させたことにより、自分の考えを理由を付け順序よ述べることや、自分の考えと比べながら聞くことができる力を付けることに効果的であった。担任による児童の実態把握からも「なかなか話ができない児童も、発表できるようになった」としている。表現する力を付けるのに効果的であったと考える。
- b 各教科で習得すべき基本語句や新出語句、読ませたい詩などを教室・廊下に掲示することにより、語彙数が増えてきていると考える。また、朝の読書や図書館の利用促進を図る取組により、児童に本を読む習慣が付いてきたことも要因と考える。

#### ＜課題＞

##### （ア）話し合い活動

- a 低学年は、友だちの意見を聞き取って理解する力が育っていないため、多い人数での話し合いをしたり、意見を整理したりすることは難しい。2～3人程の話し合い活動で、友だちの考えを復唱したり質問したりすることができるようにしていかなければならない。
- b 「深める」場面での話し合い活動は、十分に時間を確保しなければならない。児童の考えを深めるためにも、時間配分を考慮しなければならない。
- c 挿絵や実物、具体物や半具体物の活用方法を検討し、イメージを広げ言語で表現できるような手立てを工夫していかなければならない。

##### （イ）書く活動

- a 自分の思いや考えをまとめることは、時間もかかりかなりの負担を強いる。簡潔にまとめられるようプリントの工夫や書く形式を工夫して示していかなければならない。
- b 英語活動でも、学習の最後に振り返りの活動を設けていかなければならない。

##### （ウ）読む活動